

祈り

悲しみの烈しさに 身の置き所なく
薄明かりの街を ただ歩いて
いつか必ず今日のことを
痛みなく思い起こせる日が来ると
繰り返し念じながら
明るい月が 秋の夜空にきれいで

あの日 くつきりと雲を抜いた月明かりも
深い藍色の空も 本当のことを示していた
私の奥深くにあるものも 本当を知っていた
希みは叶わないと
悲しみは失せず 時が経つほど心に重く沈んでゆき
ついには どこまでが悲しみでどこまでが心なのか
分からなくなるのだと
人間が生きるとは そういうことなのだ

真実を躪わしながら 告げずにいてくれた
あの日の月の優しいひかり
そして 今
あなたが灯のような祈りをくれる
生涯去らない悲しみを 慈しむことができるようにと